

女性消防団の 活動を通して

— 今、私にできること —

はじめに、今回の東日本大震災および台風12号により被害を受けた方々にお見舞い申し上げます。

皆さんは、「消防団」と聞いて、まず何を思い浮かべますか？ 私にとって「消防団」とは、消防署がない小さな町や村にあるもの。そして、背中に『消』の丸文字を背負った紺地の半纏を着るおじさんたちの姿でした。まさか、私が住む40万人都市の枚方市に「消防団」があったとは、入団するまで知りませんでした。枚方市に女性の消防関係職員がいることは知っていました。しかし、「消防署」の職員の方だと思っていました。そんな知識しか持ち合わせていない私は、誘われるまま消防団に入団することになりました。

消防団に入ったきっかけ

私が枚方市消防団に入団したのは平成23年3月のことで、まだ1年に満たない新人です。消防団入団のきっかけは同じ職場で働くSさんでした。市の広報誌を見ていたSさんが「日比さん、横浜に行けますよ！」と、広報誌を見てください！とうれしそうな声をあげました。何のことかと誌面を覗くと、女性消防団員の写真とともに女性消防団員募集と横浜で行われる全国女性消防操法大会出場の記事が載っていました。「一緒に入団しましょうよ！」との彼女の誘いに、その時は冗談だと思いきや聞き流してしまいました。しかし、彼女の思いは本物で、とりあえず担当課へ問い合わせることにしました。それも



日比 なつ代

枚方市教育委員会
市立枚方公園青少年センター 主任

【ひび なつよ】1971年、愛知県名古屋市生まれ。佛光大学卒業後、損害保険会社勤務を経て、平成18年に枚方市役所入職。教育委員会青少年課（現社会教育青少年課）に配属され、平成20年より現職。

「体力的にも年齢的にも私ではできない。」という消極的な確認をするために。

ところが、その回答は予想外のものだったので。『小学校や自治会での防災のPRが主な業務です。やりがいのあるものですよ。ぜひ、入団してがんばってください。』
そうか。それなら私でもできそうかな……。仕事にも役立ちそうだし……。そうは思いながらも、やはりなかなか決心はつきませんでした。しかし、彼女の熱心な誘いに「思い切ってやってみよう！」と決め、ならば善は急げと、私の重い腰をSさんが持ち上げてくれて一緒に申し込みをし、入団することになりました。Sさんがいなかったら、私の消防団入団はありませんでした。

女性消防団員の活動とは

私が入団した枚方市消防団は、平成14年から女性消防団員の採用を開始し、平成23年10月1日時点で23名が在籍しています。主な活動は、規律訓練・ロープ結策訓練・水難救助訓練（夏季）などを行う定期訓練をはじめ、各小学校区の自主防災訓練で行われる応急手当訓練や初期消火訓練などへの参加・補助、地域や学校からの依頼で行う普通救命講習の実施、子どもたちへの安全教室の実施などです。このように、地域を基盤に防災に関わるさまざまな啓発活動を行っています。



この文章を書いている間（平成23年10月）にも、自主防災訓練に参加してきました。思っていたより住民の方の参加が多く、今年は全国各地でたくさんの方の災害に見舞われたため、皆さんの防災意識が高まっていることをひしひしと感じました。消火器での消火方法やAEDの操作など熱心に訓練に参加されていました。小さな女の子と一緒に写真を撮るなど、女性消防団員の周知にも一役買ったかなと思います。

また、新任団員は初任基礎教育訓練を受けることとなります。この訓練は、消防に関する基礎知識と技術の向上を図るために行われ、消防組織制度や敬礼・行進などの訓練礼式、器具の取り扱いや放水訓練などの実科訓練を学びます。実際に消火ホースを持って放水訓練を行うなど大変ハードなものでしたが、消防団員になったことを実感できた一日になりました。このような通常の活動に加え、平成23年は10月19日に全国女性消防操法大会に出場しました。この大会については、あとで詳しくお伝えしたいと思います。

入団したもの…

Sさんに誘われた消防団。申し込みも無事済んで、3月に女性消防団員の一人になり、制服のサイズ合わせをすることになりました。普段の活動着から制服、制

帽までとてもカッコいいものばかり。試着をしながら「こんなにかっこいい制服が着られるなんて！ 入団してよかった」と思いました。まったく、数週間前まで入団を悩んでいた者とは思えない言葉です。女性消防団員の部長は「制服を着たら、みんなやる気が出てくるねん。」と笑っていらつしゃいました。

さて、入団したのはいいのですが、大きな問題がありました。私の勤務先は、青少年教育施設で青少年対象にさまざまなイベントを行っています。土曜日・日曜日・祝日も開所しており、勤務体制はシフト制です。土曜日・日曜日も隔週で勤務しなければいけません。休みの日に、担当イベントの実施日と重なればもちろん勤務優先です。

休みの日と訓練日が同じになることはめったになく、まったくと言っていいくらい訓練に参加できていない状況です。訓練日の連絡をもらっても「欠席します。」の返事しかできず、正直、こんな状態では入団した意味がなく、名前だけの団員なんて他の団員の皆さんに迷惑をかけるだけなので、早々に退団したほうがいいのでは…と考え悩むこともありました。

ですが、部長や団員の皆さんは、私の職場環境を理解してくださっていて「来られる時に来たらいいからね。無理しないでいいよ。」との温かい言葉に励まされて活動を続けています。

おそらく、私と同じような悩みを持っている方は、消防団員に限らず、他の場面でもたくさんいらっしゃると思います。悩んだ時は周囲に話すのが一番です。必ず、理解してくれる人はいます。そして、無理せずマイペースでやっていくのが、長く活動できる方法なのかもしれません。

入団して感じたこと

前述の初任基礎教育訓練は、男性団員に混じっての訓練でしたが、女性団員の姿はあまり見受けられません。枚方市からは女性団員では6名しか参加しませんでした。それでも多いほうだったと思います。男性団員の話が漏れ聞こえるところでは、こちらも団員のなり手が少ないようでした。

消防団とは地域に基づいた存在です。そのため逆に、もともとの地元民ではない限り、消防団というものを知らない人もいるかもしれません（私自身がそうでした）。地域コミュニティが昔ほど密接ではない現在では、新しい担い手をつくっていくのは難しいのだと思います。

しかし、そこに女性消防団員の役割があるかもしれません。女性は、男性に比べるとまだ地域との接点があります。いわゆる近所づきあいだけでなく、お子さんがいる方は学校関係などでも地域との関わりがあると思います。その関わりの中で、

身近で気軽に周知活動をして、新しい担い手をつくっていくのは、女性のほうが得意なのではないでしょうか。

全国大会、出場

平成23年10月19日、横浜の消防訓練センターにて全国女性消防操法大会が開催されました。わが枚方市女性消防団員で構成する「枚方市女性消防隊」は、大阪府代表として出場しました。

ポンプ操法とは、消火活動の基本的な操作です。火元に例えた火点かてんと呼ばれる標的にめがけて放水し、撤収するまでの一連の手順を行います。防火水槽・火点の位置、台詞、動きが決められていて、大会では操作の速さや正確さ、動きの綺麗さを競います。

選手たちは、この日に向けて日中だけでなく夜にも練習に練習を重ねてきました。私は、練習の手伝いに1回だけ参加しましたが、一生懸命に練習する団員たちの気迫に圧倒されると同時に、こんなにも打ち込めるものを持っている彼女たちを羨ましく思いました。

大会当日の横浜は、大阪のお天気が嘘のような、どんよりとした空に肌寒い風が強く吹き、最高のコンディションとはとても言えない天候でした。



会場に到着し、入場行進を待つ選手のもとに駆けつけると、皆とてもリラックスし今日の大会を楽しんでいる様子でした。どうやら、わが消防団は入場を待っている間に、ちょっとしたダンスパフォーマンスを披露していたようで他県の選手たちから喝采を受けていたそうです。さすが大阪の女性パワー！

東日本大震災の影響で、残念ながら東北地方からの参加はありませんでしたが、開会式で日本全国から集まった女性消防隊が整列する様子は圧巻でした。

競技が始まって、天候が回復する気配はありません。風は冷たく、ますます強く吹いているようにさえ思えました。競



技は、この意地悪い風に影響され、標的に水がなかなか当たらず苦心する県がいくつか出てきました。そんな時には、対戦相手であることも忘れ「がんばれ！あきらめるな！」と声援を送り、時間オーバーで競技中止になったところには、健闘を称え拍手を贈ります。

そして、いよいよ枚方市の順番が近づいてきました。「なんだか見ているほうが緊張してきた。」と応援席の仲間とドキドキしながら、待機している選手のほうを見てみるとなんと笑っているではありませんか！なんとという余裕！この様子を見て、確信しました。「大丈夫だ！ベストを尽くしてくれる！」と。

結果は、総合順位16位、タイム順位6位でした。

団として入賞は逃しましたが、私個人は、この大会の応援に参加してうれしいことがありました。それは、選手の皆からのメッセージと、団員の皆と一緒に頑張って応援し喜びあえたこと。これで、私はやっと枚方市女性消防団員の二員になれたと心から思いました。

最後に 東日本大震災の年に入団して

阪神・淡路大震災が起こった平成7年1月17日の朝、私はぐっすり寝ていました。突然の大きな揺れに何が起こったのか訳がわからず、パニックになっていたのを覚えています。幸いにも家族や家は無事でしたが、周囲には家族をしくされた方、避難所生活を送っている方々がいらっしやいました。当時、私は保険会社に勤務しており、保険金の支払いなど仕事の上で、災害や被災者の方々と向かい合うことになりました。

そして、平成23年の3月11日、東日本大震災が発生し東北地方が甚大な被害を受け、9月には台風12号により紀伊半島も大きな被害を受けました。再び大災害が発生した年に災害と向かい合う立場になりました。

平成23年3月1日付で消防団に入団し

たばかりの私は、正直言いますと、3月11日震災当日から数日間は、自分自身が消防団員である自覚はありませんでした。テレビに映る被災者を捜索する地元消防団員の姿を見ているうちに、徐々に自分と重ねていくようになりました。「災害が発生したら、私は市職員としても、消防団員としても行動しなくてはいけないかもしれない。でも、何もできていない。」

消防団の訓練に参加できていなかったこともあり、被災地に向かう先輩職員の姿を見ながら、不安と焦りが入り混じった気持ちを抱えていました。でも、やはりここでも女性消防団員の言葉に助けられました。「今、できることをやっとうこう。」そう、焦ってもできないことはできない。緊急時にできないことを無理にやると、かえって大きな損害を残すことになる。できることを最大限にやっていく。今、私にできることは可能な限り訓練に参加し、防災活動を学び周知していくこと。偶然とはいえ、この甚大な災害に見舞われた年に入団したのです。この経験を生かし、これからも防災活動に励んでいきたいと思えます。

最後になりましたが、重ねて今回の震災や台風により被害を受けられた方々にお見舞い申し上げるとともに、一日も早い復興を願っております。